

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K21506

研究課題名(和文)近代日本の親鸞論とマルクス主義

研究課題名(英文)Shinran Discourse and Marxism in Modern Japan

研究代表者

近藤 俊太郎 (Kondo, Shuntaro)

龍谷大学・公立大学の部局等・研究員

研究者番号：00649030

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：報告者は、近代日本における親鸞論の変遷を、特にマルクス主義との関係を軸にして解明することを課題として研究を進めた。その結果、以下の点をあきらかにした。初期水平運動ではマルクス主義との思想的親和性のもとに親鸞像が形成され、それが解放運動の精神的機動力となった。反宗教運動段階になると、親鸞思想は宗教＝阿片論に解消され、支配階級に奉仕するイデオロギーと位置づけられた。親鸞はまた、宗教的転向の文脈で、天皇制国家への従属を引き出す根拠として読み込まれた。戦後になると、そうした親鸞理解を反転させ、親鸞を媒介して戦前の天皇制国家への批判的立場を構築する者が現れた。

研究成果の概要(英文)：I have been carrying out research on the transformation of discourses surrounding Shinran in modern Japan, particularly their relationship to Marxism, and found the following. In the early suihei ("leveling") movement, an image of Shinran was formed in the context of its intellectual affinity for Marxism. This provided spiritual mobility for the liberation movement. With the advent of the anti-religion movement, Shinran thought was then dissolved by the "religion as opiate" view and understood as an ideology that serves the ruling class. In the context of religiously colored tenko; (political conversion), Shinran was seen as a basis for drawing out subservience to the emperor system state. After World War II, this understanding was reversed, and people constructed via Shinran positions critical of the pre-war emperor system state.

研究分野：思想史

キーワード：親鸞論 親鸞像 マルクス主義 宗教批判 反宗教 近代仏教 戦時教学 転向

1. 研究開始当初の背景

(1) 報告者は、平成 25 (2013) ~ 26 (2014) 年度に、科学研究費補助金・若手研究 (B) (課題名「近代日本における反宗教運動と仏教の論争についての基礎的研究」、研究課題番号 25870919) に採択されたことを機に、1930 年代前半の反宗教運動とそれへの対抗的組織の資料収集を本格的に開始した。

1930 年代前半には上記の運動体のみならず、多くの宗教関係者によって反宗教運動をめぐる論争が起こっている。報告者は、こうした論争にも目を配り、反宗教運動歓迎論から反宗教運動否定論にまで及ぶ論争の全体像を再構成すべく、収集した資料の分析・検討作業を進めた。

報告者が近代日本における反宗教運動と仏教についての研究を進めるなかであきらかとなってきたのは、1930 年代の反宗教運動が提起した問題が戦後仏教史研究において反復されていることであった。戦後日本において仏教史研究がそれまでの国家主義的偏向を反転させて新たな研究を創出していく際に、研究の構想や分析方法の多くは、1930 年代のマルクス主義の諸理論に着想を得ていたのである。

以上を踏まえ、報告者は、マルクス主義をひとつの軸として反宗教運動から戦後仏教史研究までを見通すことで、何がどう反復され、何が反復されなかったのかを解明すべきだと考えた。

(2) もうひとつの軸として親鸞論を設定したのは、近代の知識人の多くが親鸞に魅了され、多様な親鸞像を形成していること、戦後に日本仏教史の全体像が構築される際に親鸞理解が要の位置にあること、そして親鸞像の変遷にこそマルクス主義歴史学の影響が明瞭に表出していると考えたことによる。

明治末期以降になると、それまで本願寺教団によって提示されてきた伝統的な親鸞像が相対化され、新たな親鸞像が模索されていった。そうした動向に注目した従来の研究では、倉田百三ら文学者による親鸞像が注目を集めてきた。他方、マルクス主義との関連から親鸞理解の変遷を追跡した研究成果は乏しい。そこで報告者は、近代における親鸞像の変遷という視点から、マルクス主義の親鸞像の位置を探究することが必要だと考えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、近代日本における親鸞像の変遷を、特にマルクス主義との関連に焦点を当て、あきらかにすることである。

近代、ことに明治末期以降になると、それまで本願寺教団によって提示されてきた伝統的な親鸞像が相対化され、新たな親鸞像が模索されていった。木下尚江や原勝郎、倉田百三などの親鸞像は、それを代表するものである。他方で、こうした著名な親鸞像以外にも、マルクス主義の影響下で新たな親鸞像

が形成されていた。

そこで、本研究は、1920 年代の初期水平運動や 1930 年代前半の反宗教運動の担い手たち、さらには刑務所で親鸞と接したことで転向した思想犯、そして敗戦直後の服部之総・二葉憲香らによる親鸞像などを対象として関係資料を収集し、分析・検討を加えることとした。

(2) 本研究は、近代仏教史研究のみならず、仏教学や日本史学、さらには近代日本の社会科学や戦後歴史学の理論的背景の解明など、その関連する研究領域が広い点に特色を持っている。それだけに、本研究の成果はそれぞれの研究領域にも波及する可能性がある。

したがって、本研究の成果は、近代仏教史研究の空白部分を埋めることはもとより、近現代日本の政治と宗教という問題系に対して、あるいはマルクス主義と仏教をめぐる問題に対して、さらには日本思想史研究の認識論的枠組みに対して、新たな問題を提起することにもつながるかもしれない。

3. 研究の方法

(1) 本研究の目的からすれば、何よりもまず一次資料の収集に努めなければならない。そのため、大学図書館や、各研究機関、真宗寺院、また古書店に流通するものなども視野に入れて、資料収集を進めた。

また、収集した資料の整理・分析がどこまで徹底できるのかが研究の質を左右するため、資料収集および整理・分析作業を効率的かつ慎重に進めた。

(2) 分析手法としては、まずはマルクス主義と親鸞像との関係を系譜的に追跡することが重要となる。

そこで報告者は、初期水平運動、反宗教運動、宗教的転向、戦後仏教史研究、に注目し、それぞれの段階でどういった親鸞像が形成されていたのかを解明した。そして、それぞれの親鸞像が形成される思想的背景を検討し、さらにそれらの親鸞像の歴史的意義について考察を進めた。

4. 研究成果

(1) 初期水平運動では、その担い手たちによって「社会的弱者とともにある親鸞像」が形成され、その親鸞像が運動の精神的機動力として機能した。

水平運動の担い手の多くは真宗門徒であったため、運動にとっては真宗の問題をどう位置づけるかが重要だった。水平運動に理論的方向性を与えようと種々活動した佐野学が、「革命的宗教家」として親鸞を表象し、真宗信仰とマルクス主義を架橋しようとしたのは、そうした関心に基づいていた。

初期水平運動の親鸞像は、本願寺教団側から厳しい批判を受けたことで、親鸞理解をめぐる激しい論争が起こった。大谷尊由と西光

万吉を中心とするこの論争は、社会的差別を信仰の問題として考えるか否か、という点が議論の核心を構成していた。

ただし、水平運動は、やがて運動の性格を変容させ、マルクス主義との親和性を高めていった。その結果、水平運動は反宗教運動へと傾斜し、親鸞像は後景化していった。

(2)反宗教運動期には、マルクス主義者の宗教理解の基本に、宗教を下部構造(経済構造)の反映として把握する反映論と、被支配階級を眠り込ませることで結果的に階級闘争を阻害する宗教=阿片論とが据えられた。

マルクス主義の宗教理解はやや教条的で、それから逸脱する理解を容赦なく論難したこともあり、ひどく硬直化していった。そのために、親鸞の立場もそうした宗教理解の枠内に解消され、「支配階級に奉仕する親鸞像」が形成された。これは、親鸞独自の立場を追求した結果として形成されたのではなく、宗教一般に対する理解を当てはめただけのものであった。

他方、支配階級の一端を担う本願寺教団と親鸞の立場とを同一視せず、親鸞をあくまでも民衆(被支配階級)の側に立とうとしたとする理解も提示された。これは戦後の親鸞研究に引き継がれる重要な論点の一つとなった。

(3)満州事変以降、反宗教運動が失速していくと、マルクス主義と親鸞をめぐって、新たな問題が浮上した。マルクス主義者による転向問題である。

司法省行刑局の主導により、宗教を介した思想転向政策が、教誨事業を独占していた本願寺教団を通して推進されるなか、刑務所で思想犯の多くが、読書を通じて親鸞に触れ、悪人正機(悪人正因)説が転向の根拠として再構成されていった。

転向を表明する思想犯は、真宗信仰や阿弥陀仏信仰といった立場を慎重に回避しながら、いかにそれを踏まえることで天皇崇拝が可能になったのかを弁証した。たとえば佐野学は、初期水平運動の際の親鸞像とは異なる、新たな親鸞像を形成し、それによって自己の思想転向を説明しようと試みた。

(4)戦時下では、本願寺教団による戦時教学が加速したことで真宗信仰の神道的解消が進み、親鸞像は護国思想のなかに回収された。「護国思想的親鸞像」は様々な形態をとりながらも、大枠として戦時体制に照応した性格にあった。『国体の本義』でも親鸞は日本精神を踏まえたがゆえにその立場を構築し得たと論じられた。

他方、戦時下で家永三郎は「否定の論理の完成者としての親鸞像」を形成した。家永は、「否定の論理」という家永思想史学の鍵概念の発達史の頂点に親鸞を位置づけた。それは親鸞を直接的に護国思想に回収する議論と

は質を異にしていたが、その否定の内実を明確化しきれなかったために、戦時下では国体的視pointsから受容される場合もあった。

(5)戦後仏教史研究のなかで、親鸞は多くの研究者の注目を集めた。護国思想的親鸞像を反転させ、「農民とともにある親鸞像」を形成したのは服部之総『親鸞ノート』であった。服部は、護国的親鸞像を形成する際に繰り返して援用されていた親鸞の消息を反語として読みなおすことで、新たな解釈を提示した。その解釈の妥当性とは別に、服部の方法意識には戦後歴史学の原型のようなものが伏在しており、それゆえに戦後親鸞研究をリードすることができた。

また、戦後歴史学では一向一揆を階級闘争的視点から読み直す作業も進展したが、その多くがエンゲルス『ドイツ農民戦争』を範型としてその対応物を求める議論にとどまった。

(6)戦後仏教史研究のなかでは、マルクス主義に大いに影響を受けながらも、仏教の歴史として親鸞を捉える研究が二葉憲香によって進められた。二葉は、皇国史観・唯物史観と対決し、独自の仏教史観を形成していった。研究主体による仏教理解を基本に据え、仏教の歴史として対象を捉えるその方法は、マルクス主義的宗教理解や歴史観からは死角になっていた問題をいくつも浮かび上がらせた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

近藤俊太郎、「戦後日本の仏教界と靖国神社問題」、『宗教研究』、査読無、第91巻別冊、日本宗教学会、2018年、132-133頁

近藤俊太郎、「日本における政治の宗教性 島蘭進の近著数冊を手がかりに」、『変革のアソシエ』、査読無、第29号、社会評論社、2017年、82-86頁

近藤俊太郎、「反宗教運動から宗教復興へ」、『宗教研究』、査読無、第90巻別冊、日本宗教学会、2017年、128-129頁

近藤俊太郎、「永岡崇著『新宗教と総力戦 教祖以後を生きる』(名古屋大学出版会・二〇一五年)」、『日本思想史学』、査読無、第48号、日本思想史学会、2016年、235-241頁

近藤俊太郎、「天皇制国家と「精神主義」 清沢満之を中心に」、『現代と親鸞』、査読無、第33号、親鸞仏教センター、2016年、231-250頁

近藤俊太郎、「近代日本におけるマルクス主義と仏教(下) 反宗教運動をめぐって」、『仏教史研究』、査読有、第54号、龍谷大学仏教史研究会、2016年、55-80頁

近藤俊太郎、「戦時下仏教思想史研究の一断面 家永三郎の親鸞論」、『宗教研究』、査読無、第89巻別冊、日本宗教学会、2016年、289-290頁

近藤俊太郎、「コメント2 新野和暢「皇道仏教という思想」へのコメント・質問」、『人文学報』、査読無、第108号、京都大学人文科学研究所、2015年、117-121頁

近藤俊太郎、「《書評》小川原正道著『日本の戦争と宗教 1899-1945』」、『近代仏教』、査読無、第22号、日本近代仏教史研究会、2015年、66-70頁

〔学会発表〕(計8件)

近藤俊太郎、「日本文化史における近代仏教の意義 暁烏敏と金子大榮における戦争責任の問題」、2017 近代東亞宗教的變遷與發展學術研討會、2017年10月28日、佛光大學佛教學系

近藤俊太郎、「戦後日本の仏教界と靖国神社問題」、日本宗教学会第76回学術大会、2017年9月17日、東京大学

近藤俊太郎、「佐野学の宗教論 親鸞理解の軌跡」、第14回「仏教と近代」研究会、2017年8月27日、佛教大学

近藤俊太郎、「近代真宗史への入射角」、真宗大谷派教学研究「宗門近代史の検証」班研究会、2016年11月8日、真宗大谷派教学研究

近藤俊太郎、「反宗教運動から宗教復興へ」、日本宗教学会第75回学術大会、2016年9月11日、早稲田大学

近藤俊太郎、「1930年代の宗教言説 反宗教運動と宗教復興を中心に」、京都大学人文科学研究所 共同研究「日本宗教史像の再構築」第20回研究会の公開研究会「宗教とメディアの1930年代」、2016年8月19日、京都大学人文科学研究所

近藤俊太郎、「反宗教闘争と階級闘争 反宗教闘争同盟準備会を中心に」、第12回「仏教と近代」研究会、2016年3月10日、愛知学院大学

近藤俊太郎、「戦時下仏教思想史研究の一断面 家永三郎の親鸞論」、日本宗教学会第74回学術大会、2015年9月5日、創価大

学

〔図書〕(計5件)

近藤俊太郎 他、『『反省会雑誌』とその周辺』、法蔵館、2018年、77-91頁

近藤俊太郎 他、『令知会と明治仏教』、不二出版、2017年、1-5、9-39頁

近藤俊太郎 他、『仏教史研究ハンドブック』、法蔵館、2017年、324頁

近藤俊太郎 他、『戦後歴史学と日本仏教』、法蔵館、2016年、301-325頁

近藤俊太郎 他、『近代仏教スタディーズ 仏教からみたもうひとつの近代』、法蔵館、2016年、21-36、97-100、141-144、265-273頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 俊太郎 (KONDO, Shuntaro)
龍谷大学・仏教文化研究所・研究員
研究者番号：00649030